

解答は、すべて答案用紙に記入して下さい。

# 2 級

## 2020 年 度 第 1 回 メイプル簿記検定試験 問 題 用 紙

(制限時間 2 時間)

(2020 年 6 月 14 日(日) 施行)

簿記の教室 メイプル

## 第1問 (20点)

下記の各取引について仕訳しなさい。ただし、勘定科目は、次の中から最も適切と思われるものを選び、正確に記入すること。

現金	普通預金	当座預金	別段預金
受取手形	営業外受取手形	売掛金	商品
貯蔵品	建物	備品	のれん
支払手形	営業外支払手形	買掛金	仮受金
預り金	貸倒引当金	修繕引当金	資本金
株式申込証拠金	資本準備金	その他資本剰余金	利益準備金
修繕積立金	繰越利益剰余金	売上	売上割引
修繕引当金戻入	受取利息	負ののれん発生益	仕入割引
修繕引当金繰入	修繕費	支払手数料	支払利息

- 得意先に「当社の規定に従い、一定数量以上の商品を注文した大口の顧客に対し、代金の2%相当額の支払いを免除する」という連絡を入れ、当社の当座預金口座から得意先の預金口座に¥96,000を振り込んだ。
- ×年10月1日、商品陳列棚を分割払いで購入し、代金として毎月末に支払期日が順次到来する額面¥300,000の約束手形6枚を振り出して交付した。なお、商品陳列棚の現金購入価額は¥1,728,000である。
- 建物の修繕工事を行い、代金¥1,700,000は小切手を振り出して支払った。なお、工事代金の20%は改良のための支出と判断された。また、この修繕工事に備えて、前期に¥1,100,000の引当金を設定している。
- 新株1,000株(1株の払込金額は¥30,000)を発行して増資を行うことになり、払い込まれた1,000株分の申込証拠金は別段預金に預け入れていたが、株式の払込期日となったので、申込証拠金を資本金に充当し、別段預金を当座預金に預け替えた。なお、資本金には会社法が規定する最低額を組み入れることとする。
- 同業他社の事業の一部を譲り受けることになり、譲渡代金¥8,500,000を普通預金口座から相手先口座に振り込んだ。この取引により譲り受けた資産の評価額は、商品¥1,800,000、建物¥5,000,000、備品¥1,000,000であり、引き受けた負債はなかった。

## 第2問 (20点)

前期末(×8年3月31日)の固定資産管理台帳の内容(取得原価の部分まで)は、下記の(1)に示したとおりであった。当期(×8年4月1日から×9年3月31日までの1年間)の固定資産関係の取引は、(2)に記載されており、減価償却の方法は(3)に記載されている。

## [設問]

1. 答案用紙に示された当期の諸勘定(一部)に必要な記入を行い、締め切りなさい。
2. 答案用紙に示された×9年3月31日の固定資産管理台帳(一部)の記入を完成しなさい。
3. 当期の固定資産除却損の金額を答えなさい。

## (1) 固定資産管理台帳

取得年月日	用途	期末数量	耐用年数	取得原価
建物				
×3. 4. 1	事務所	1	25年	9,000,000
備品				
×4. 4. 1	備品A	4	8年	3,200,000
×5. 4. 1	備品B	5	10年	2,000,000
×7. 4. 1	備品PC	6	4年	2,400,000
ソフトウェア				
×1. 4. 1	システムX	1	10年	5,000,000
×6. 10. 1	システムY	1	10年	6,000,000

## (2) 当期の取引

- ① ×8年4月1日に備品C(耐用年数6年)を¥1,000,000(翌月末払い)で購入した。
- ② 固定資産の棚卸を実施したところ、備品Bのうち1個が滅失していることが判明し、前期末の帳簿価額にもとづき除却処理を期首で行うこととした。
- ③ ×8年10月1日に、事務所の改築を行い、改築工事の代金¥1,200,000(翌月末払い)が資本的支出であったため、これを建物勘定に追加計上し、耐用年数20年で減価償却を行うこととした。
- ④ ×9年1月1日から、新たなシステムZが稼働しソフトウェアの代金(翌月末払い)は¥4,000,000であった。システムZ(耐用年数10年)の稼働に伴い、システムXが不要となったため、12月末の帳簿価額にもとづき、期末で償却費の計上と除却処理を行った。

## (3) 減価償却方法

減価償却費は年次で期末に一括計上している。減価償却の方法は、以下のとおりである。

建物 ; 定額法(残存価額ゼロ)、期中取得分は年間の償却費を月割で計算(間接法による)

備品 ; 200%定率法(間接法による)

ソフトウェア ; 定額法、期中取得分は年間の償却費を月割で計算(直接法による)

耐用年数に対応する償却率は、下表のとおりである(計算にあたってはこの表の数値を用いること)。

耐用年数	4年	6年	8年	10年	15年	20年	25年
定額法	0.250	0.167	0.125	0.100	0.067	0.050	0.040
200%定率法	0.500	0.333	0.250	0.200	0.133	0.100	0.080

なお、各年の減価償却費の計算と、固定資産除却損の算定に用いる減価償却累計額の計算により生ずる円未満の端数は、切り捨てて計算すること。

## 第3問 (20点)

次の【資料】にもとづいて、×4年度(×4年4月1日から×5年3月31日まで)の連結精算表(連結貸借対照表と連結損益計算書の部分)を作成しなさい。

## 【資料】

1. P社は、×1年3月31日にS社の発行済株式総数(8,000株)の80%を250,000千円で取得して支配を獲得し、それ以降P社(親会社)は、S社(子会社)を連結子会社として連結財務諸表を作成している。×1年3月31日のS社の純資産の部は、次のとおりであった。

資本金	200,000千円
資本剰余金	50,000千円
利益剰余金	50,000千円

2. S社は支配獲得後に配当を行っておらず、また、のれんは20年にわたり定額法で償却を行っている。
3. S社は、P社から機器を仕入れ、西日本地域で販売しているが、これ以外にS社が独自に仕入れて販売を行っている商品もある。
4. 連結会社(P社およびS社)間の債権債務残高および取引高は、次のとおりであった。

<u>P社からS社</u>				<u>S社からP社</u>			
売掛金	40,000千円	買掛金	40,000千円				
貸付金	80,000千円	借入金	80,000千円				
未収入金	12,000千円	未払金	12,000千円				
売上高	210,000千円	仕入(売上原価)	210,000千円				
受取利息	1,200千円	支払利息	1,200千円				

5. ×3年度末と×4年度末にS社が保有する商品のうちP社から仕入れた商品は、それぞれ22,000千円と24,000千円であった。P社がS社に対して販売する商品の売上総利益率は、2年度とも25%であった。
6. P社は×4年度中に土地(帳簿価額70,000千円)を、S社に対して80,000千円で売却した。

## 第4問 (20点)

BKM製作所では、工程の始点で投入した原料Sを加工して製品Mを生産している。標準原価計算制度を採用し、勘定記入の方法はシングル・プランによる。製品Mの標準原価カードは次のとおりである。

原料費	標準単価	200円/m <sup>3</sup>	標準消費量	2 m <sup>3</sup>	400円
加工費	標準配賦率	500円/時間	標準直接作業時間	4時間	<u>2,000円</u>
製品M 1個当たり標準製造原価					<u>2,400円</u>

次の【資料】にもとづいて、下記の各問に答えなさい。

## 【資料】

- 原料S 3,500 m<sup>3</sup>を1 m<sup>3</sup>当たり215円で掛けにて購入した。当工場では実際の購入単価をもって材料勘定への受入記録を行っている。
- 原料Sの実際消費量は3,000 m<sup>3</sup>であった。原料の消費額については、製品の生産実績にもとづき、月末に一括して仕掛品勘定に振り替え、原価差異を把握する。
- 原料Sの月末在庫は500 m<sup>3</sup>であった。月初在庫はなかった。
- 製品Mの生産実績は次のとおりである。

月初仕掛品	600 個 (加工進捗度 60%)
当月投入量	<u>1,400</u>
合計	<u>2,000 個</u>
月末仕掛品	<u>500 (加工進捗度 25%)</u>
当月完成品	<u><u>1,500 個</u></u>

- 問1 【資料】(1)の取引について仕訳しなさい。勘定科目は問2の答案用紙にあるものを使用すること。
- 問2 答案用紙の各勘定に適切な金額を記入しなさい。なお、材料勘定には、原料Sに関する取引だけが記録されている。

## 第5問 (20点)

当社は製品Kを製造し、製品原価の計算は累加法による工程別総合原価計算を採用している。次の[資料]にもとづいて、第1工程月末仕掛品の原料費と加工費、第2工程月末仕掛品の前工程費と加工費、第2工程完成品総合原価を計算しなさい。なお、原価投入額を完成品総合原価と月末仕掛品原価に配分する方法は、第1工程は平均法、第2工程は先入先出法を用いること。

第1工程の途中で発生する正常仕損品に処分価額はなく、この正常仕損の処理は度外視法による。第2工程の終点で発生する正常仕損品は462,000円の処分価額があり、第2工程の正常仕損費は完成品に負担させること。

## [資料]

	第1工程	第2工程
月初仕掛品	700 個 (60%)	600 個 (40%)
当月投入	9,000	8,800
合計	9,700 個	9,400 個
正常仕損品	100	200
月末仕掛品	800 (80%)	500 (30%)
完成品	<u>8,800 個</u>	<u>8,700 個</u>

(注) 原料はすべて第1工程の始点で投入し、( )内は加工費の進捗度である。

	第1工程	第2工程
月初仕掛品原価		
原料費	483,000 円	— 円
前工程費	—	906,000
加工費	348,600	527,700
小計	<u>831,600 円</u>	<u>1,433,700 円</u>
当月製造費用		
原料費	6,093,000 円	— 円
前工程費	—	?
加工費	7,345,000	18,633,150
小計	<u>13,438,000 円</u>	<u>? 円</u>
投入額合計	<u>14,269,600 円</u>	<u>? 円</u>

(注) 上記資料の「?」は各自計算すること。